

平成 22 年 5 月 14 日現在

研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2008 ～ 2009  
 課題番号：20720098  
 研究課題名（和文） 中華民国期京劇の舞台装置に関する研究  
 研究課題名（英文） A study on stage sets for Beijing opera in period of Republic of China  
 研究代表者  
 田村 容子 (TAMURA YOKO)  
 福井大学・教育地域科学部・講師  
 研究者番号：10434359

研究成果の概要（和文）：本研究は、中華民国期京劇の舞台装置について、主として西洋式劇場において用いられた新式舞台装置の実態の解明に焦点を絞り、図像と文字資料の両面から調査を行うものである。調査は主に中華民国期における上海の舞台装置の発展、および上海から北方への伝播過程を対象とした。二十世紀中国演劇の志向した「近代」とは何であったかということ、「中国近代演劇の目指した視覚的効果」という点から考察することを目的としている。

研究成果の概要（英文）：

This study focuses on finding out how the European style stage sets were used in Beijing opera, and it is conducted using both images and documents. The development of the stage sets in Shanghai and the processes of diffusion to the northern part are subjected to the investigation. And the purpose of this study is to find out the modernism of Chinese theatre in the 20<sup>th</sup> century by considering the optical effect in the modern Chinese theatre.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：京劇・中華民国・舞台装置・劇場・中国演劇

#### 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、二十世紀中国演劇を研究するにあたり、「舞台装置」という後世に資料として伝わりにくいものを対象としている。こ

の分野の研究は、中国国内においては劇場史を概説的に述べたものはあるものの、舞台装置史の論考は非常に少なく、また専門の研究者も数少ない。中国・日本ともに清末から中

華民国初期にかけての劇場の変化については先行研究がいくつか見られ、たとえば沈定盧「清末上海的舞台灯彩」(『中華戯曲』第9輯)、平林宣和「上海と『看戯』——京劇近代化の一側面」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊文学・芸術編21集)などがある。しかし「舞台装置」自体に着目し、その華民国期の変遷を通観することによって二十世紀中国演劇史をとらえ直そうとする試みは、資料収集の困難などの理由からいまだなされていない状況にある。

(2) 研究代表者はかつて、1920年代の京劇の舞台装置をめぐる、中国人俳優梅蘭芳と日本人舞踊作家福地信世の見解の共通点と相違点について考察したことがある。その過程で福地信世の1920年代の京劇スケッチを調査し、西洋式劇場における上演風景が描きこまれていることを確認した。写真などの少ない華民国初期の京劇の舞台装置は、その実態が明らかにされていない。また文字資料に見られる当時の舞台装置についての叙述は、京劇の伝統を重視する書き手によるものが多く、新式の舞台装置は低俗であると評価される傾向にある。現在にいたるまで、そのような叙述は京劇の舞台装置研究に影響を及ぼしており、文字資料の記述に頼った研究がなされてきた。そこで、客観的な視点から文字資料と画像資料の両面を調査し、従来の中国舞台装置史、ひいては演劇史観を再考するため、華民国期京劇の舞台装置の研究に着手した。

研究代表者は、これまで主に①華民国期における京劇の女性役「旦」を演じる俳優の性別の交代(女形から女優へ)について、および②二十世紀中国演劇における伝統劇の新作について、研究を行ってきた。本研究は、上記①②の研究テーマともかかわる「二十世紀の中国京劇に見られる伝統との連続性/非連続性」について、舞台装置の面から考察を試みるものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、華民国期京劇の舞台装置について、主として西洋式劇場において用いられた新式舞台装置の実態の解明に焦点を絞り、画像による視覚的資料と文字による文献資料の両面から調査を行うものである。調査は次の三点について、二年間にわたって行う。

(1) 華民国初期(1910-1920年代) 上海における京劇の舞台装置について

(2) 華民国中期以降(1930年代以降) 上海における京劇の舞台装置について

(3) 華民国期北方(北京・天津)における京劇の舞台装置について

最終的には、①華民国期上海における京劇の新式舞台装置の発生と北方への伝播の流れ、および②華民国期における舞台装置の発展がもたらす京劇の総合芸術化と「新劇」との関連、の二点についてその詳細を明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究は、華民国期における京劇の舞台装置について、上述した(1)~(3)の三段階に分けて調査を進めていく。

平成20年度は(1)について、上海における西洋式劇場・新式舞台装置の発生期から隆盛期の変遷を、主として画像資料・文献資料の両面から実証的に追った。

平成21年度は(2)・(3)について、上海で隆盛期を迎えた新式舞台装置の発展と、北方への伝播の過程を、主として文献資料から明らかにすることを目指した。さらには、舞台装置について述べられた劇評・記事の叙述を分析することを通して、舞台装置をめぐる言説の変遷に見る華民国期京劇の舞台装置受容史を確認した。

### (1) 平成20年度

4-7月 華民国初期~中期の上海における舞台装置の調査(大阪市立大学図書館・早稲田大学演劇博物館における所蔵資料調査)

8月 台湾・台北市における資料収集(国立台湾大学図書館・国家図書館における華民国期雑誌資料調査)

9-10月 華民国期北方における上演状況調査(『順天時報』『北洋画報』『大公報』記事調査)

11-12月 華民国初期~中期の上海・北京の舞台装置について研究成果発表

1月 中国・上海市における資料収集(上海図書館における華民国期雑誌資料調査)

2-3月 華民国期北方における京劇の舞台装置について論文執筆

### (2) 平成21年度

4-5月 第三回京劇学国際学術研討会において研究成果発表および関連資料収集

6-8月 華民国初期~中期の北方における上演状況・舞台装置の調査

(『順天時報』『北洋画報』『大公報』記事調査)

9月 中国・上海市における資料収集(上海図書館における華民国期雑誌資料調査)

10-12月 1930-1940年代北京・上海における舞台装置について資料調査

(大阪市立大学・早稲田大学における華民国期雑誌資料閲覧)

1月 中国・台北市における資料調査(国家図書館における華民国期上海関連資料調

査)

2-3月 中華民国期における舞台装置の受容とジャーナリズムについて新聞記事調査  
『先施樂園日報』記事調査)

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究の主な成果

###### ①平成20年度

本年度は、「研究の目的」で述べた三点のうち(1)について、大阪市立大学図書館・早稲田大学演劇博物館において中華民国初期～中期の上海の舞台装置に関する調査を行ったほか、中国・上海図書館において中華民国初期～中期の劇場に関するマイクロフィルム閲覧を行った。また、(2)については台湾の国立台湾大学図書館・国家図書館において1930-1940年代の上海京劇の舞台装置に関する資料調査を行った。(3)については『順天時報』の新聞記事にもとづき関連記事のデータベース化作業を行った。

これらの研究の成果として、平成20年12月13日、福井大学言語文化学会において「清末民初の北京の劇場について」と題する口頭発表を行った。

###### ②平成21年度

本年度は、以下の通り研究活動を行った。5月15日～17日にかけて、中国北京市で開催された「第三回京劇学国際学術研討会」において、論文「從新舞台到更新舞台：《申報》《梨園公報》中窺見的京劇新式舞台」を書面により発表した。当該論文は、早稲田大学演劇博物館に所蔵される中華民国時期の舞台美術関連資料を紹介し、「研究の目的」で述べた(1)～(3)の時期の新式舞台装置について考察したものである。研討会上での自由討論を経て加筆修正の後、平成22年度に中国戯曲学院の編集により中国で出版される論文集に掲載予定である(原稿受理済)。

また、上海図書館および国家図書館において、「鴛鴦蝴蝶派」文人の手による劇評の収集、および上海で隆盛した「機關布景」の台湾への伝播に関する資料調査を行なった。これらの調査は今後も継続し、次の研究課題として引き続き考察したい。

##### (2) 成果の国内外における位置づけとインパクト

###### ①国内

本研究を遂行するにあたっては、「京劇史研究会」において、定期的に研究の進捗状況について報告を行った。当該研究会は西日本を拠点とする同領域の研究者によって開催されており、科学研究費補助金・基盤研究(C)「新中国建国前後における伝統劇の多角的研究」(課題番号18520273)などにおいて一

定の研究成果の蓄積を持つ団体である。申請者は上記研究課題に研究協力者として参加している経緯があり、本研究に関連する情報は、当該研究会上の報告を通して同領域を扱う研究者間で共有することが可能となった。

また、「福井大学言語文化学会」における発表を通し、国文学の領域において日本近代演劇の研究を行う研究者と意見交換を行った。十九世紀末から二十世紀にかけての中国の劇場および舞台装置の変化には、例えば日本人の手による洋画背景の導入など、日本を経由した西洋近代主義の受容を指摘することができる。その直接的な交流史の解明、および日本・中国の近代における劇場空間の質的变化という学際的な研究の可能性について、将来の共同研究の萌芽となりうる討論を行った。

###### ②国外

中国戯曲学院の主催する「第三回京劇学国際学術研討会」において、研究成果発表を行った。当該国際学会は2005年より隔年で開催され、中国における「京劇学」という新しい学問分野の確立を推進する役割を果たしている。国内外から百数十名が出席したこの学会では、91編を収録する論文集にもとづく自由討論の形式で、三日間にわたり議論が交わされた。当該国際学会での討論を経た結果、研究代表者の成果論文の意義は下記の2点にあると考えられる。

1. 中国においても、上海文化史研究の視点から京劇の劇場・舞台装置に着眼した研究があらわれ始めている。そのような研究動向の中で、日本所蔵の資料を発掘・紹介した。

2. 中国における上記の研究の多くが文献資料にもとづく史学的方法に依拠しているのに対し、図像資料や文学作品などの資料にもとづき、モダニズムの受容という視点から、同時期の多様なメディアを越境的・横断的に考察することを提起した。

##### (3) 今後の展望

中華民国期における劇場・舞台装置に関する資料調査の結果、当時「鴛鴦蝴蝶派」と称する文学流派に属した文人の書いた劇評が、観客である大衆を牽引し、従来とは質の異なる新たな「劇場空間」を発見し、普及させる役割を担ったのではないかという問題が浮上してきた。

今後は「鴛鴦蝴蝶派」文人の上海における京劇をめぐる言説を集め、考察することにより、当時のジャーナリズムの先端に位置した人々と演劇界の動向との関連性を探っていくたいと考えている。それは、演劇が中国の近代的メディアとして成熟していく過程を探るという研究課題にもつながりうるものである。最終的には、①舞台装置への言及に

見られるモダニズム意識の萌芽とその普及、  
②上海の娯楽環境における各種の劇場およびそこで演じられる劇の位置づけと近代化の過程、の二点について、詳細を明らかにしていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

①田村容子、従新舞台到更新舞台:《申報》《梨園公報》中窺見的京劇新式舞台、第三回京劇学国際学術研究会、2009年5月15日～17日 (書面による発表)、新北緯飯店 (中国北京市)

②田村容子、清末民初の北京の劇場について、福井大学言語文化学会、2008年12月13日、福井大学文京キャンパス

[図書] (計1件)

①田村容子、他、京劇与現代中国社会——第三屆京劇学国際学術研究会論文集、中国戯曲学院編、2010年 (予定)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

田村 容子 (TAMURA YOKO)

福井大学・教育地域科学部・講師

研究者番号: 10434359